

第4部会

数々とともに、晩年の公開講演における貴重な肉声も披露され、特に生前の矢内原の面影を知る人々から非常に大きな反響を得ることができた。

このように、展覧会は各方面の多大な支援と、幅広い分野の方々の熱心な参画によって、教育・学問・信仰という三つの主要な領域から、矢内原忠雄という人物についての新たな像を結ばせていった。会場で行われていたアンケートには、思想的混乱を深める今こそ、矢内原のような一貫した立場に身をおいて高い批評精神を発揮し、時代を導いていった指導者の足跡と著作を紐とき、思想家としての彼を再評価すべきであるとの声が多数寄せられた。その関心と最も呼応することとなった「矢内原忠雄とキリスト教」を主題としたシンポジウムにおいては、矢内原の学問的・伝道的批評活動、公事と私事との峻別、他民族への愛、聖書研究の特色と共同体形成などの論点が、多角的かつ総括的に議論された。

以上のような展示、発表、議論を経て自然と浮かび上がったのが、矢内原の果たした歴史的な役割の重要性と、時代を経てもなお批判力を失わない、学問的思索態度と社会的言動との連関の奥深さである。彼は戦前は植民地研究、戦中は聖書研究、戦後は大学教育に主要な活動の場を得たが、そのいずれにおいても既存の制度を私化して超国家的正義を軽んずる権力者への絶えざる批判と、社会的弱者への愛と励ましを明確化した。彼はそのような独立した立場を、雑誌発行によってつなかりを得た多くの見えざる共同体の構成員たちによって支えられたのだった。身心ともに弱い単独の人間が学問的教養と聖書の

言葉を携えて、いかに覚悟と連帯の共同体を継続させていったのか。その足跡を丹念にたどる作業こそ、矢内原の思想全体を新たな奥行きをもつて起立させる一つの鍵だと考える。

遠藤周作の思想「母なるもの」再考

長谷川(間瀬) 恵 美

遠藤周作(一九二二—一九九六)の文学活動における宗教的主題は、「いかにしてキリスト教が日本文化内において開花することができるか」というキリスト教の実生化(Inculturation)の問題であった。私は、遠藤が第一段階(相克)「一九四七—一九六五」において発表した数々の短編小説、評論等の中で使用する「汎神性(パンテイスム)」という語を考察すること、その後展開される「母なるもの」という思想に積極的な評価を見出すことができると考えた。

汎神論(Pantheism)は、宇宙全体がそのまま神であるという思想であることから、「天地万物の創造主である神」と「被造物である世界」との区別が見失われる。そこで、唯一神論のキリスト教世界では、汎神論は否定されてきた。しかし、キリスト者遠藤が語る「日本的汎神性」とは、汎神性を母体とした日本的感性のことであり、一般的な用語とは異なる。それは、自然描写等において神の存在を感じることであり、例えば雪を美しいと感じることが同時に、「聖い」「清い」と感じることで

もあり、その感情は罪の浄化につながる。これを神の恩寵と見ることが遠藤の「汎神論」の性質であると私は解釈している。

遠藤の語る「汎神性」の性格は、受動的、個即全、非対立と要約される。遠藤はフランス留学中すでに、自身が表現する「日本的汎神性」を、「吸収へのあこがれ」、「甘ったれ精神」、「東洋的諦念」と批判的に分析している。それでも、「いかなる西欧の思潮といえども僕等の文学に移入される時には、まず形而下的には日本の社会的地盤によって屈折され、更に形而上的には日本の汎神的地盤によって溶解されてしまう」ことは免れ得ないと断言している。

こうした第一段階のキリスト教の実生化における準備段階を経て、一九六六年に『沈黙（日向の匂い）』が発表された。この作品において、「日本的汎神性」は、溶解力を持つ魔力として、「毒草」「蜘蛛の巣」「泥沼」といったメタファーで表現され、「日本泥沼論」として提示される。『沈黙』に登場する四人の主人公は日本的汎神性に取り込まれた棄教者、西洋キリスト教の視点から見れば、弱者、裏切り者、背教者である。しかし、遠藤は、そのような弱者すべてをも包み、愛してやまない神の語りを、自然描写において描いた。そして、終に「日本的汎神性」という、日本の精神的土壌において育まれた精神構造をも抱擁する「母なるもの」として、積極的な神のイメージを提起したのである。

遠藤の「母なるもの」の思想は文化的、時代的、また個人的な体験というコンテキストにおいて構成されたものである。しかしそこから展開される、「日本的汎神世界」に遠藤が見出し

た無限な愛とその大いなる働きに抱擁されたいという感覚は、遠藤の「直接経験」であった。遠藤が語る「母なるもの」とは、自らの弱さ（罪深さ）を謙虚に自覚する者に向けられる赦しの眼差し、つまり個人の神秘的経験から導き出された宗教言語である。「母なるもの」とは聖なるものの体験が言語化されたヌミノーゼである。この魂の領域においては、いかなるジェンダー論も介入していない。

日本人キリスト者に与えられた十字架としての「日本的汎神性」と、そこに存在する「東洋的諦念」および「虚無的な感覚」の「怖ろしさ」は、愛が徹頭徹尾、復讐ではなく許しであるという思想によって、また絶対的な愛と許し、抱擁の原理と和合の思想から導きだされる「母なるもの」によって救済される。愛の原型と普遍的な真理・救済は、人類に共通であると考ええる立場からすれば、遠藤が日本の宗教多元性文化において見出した「母なるもの」の思想は、地域・文化・民族・時代を超えたキリスト教の本質的信仰を表現するものとして、また人類志向にいたる道として、大いに評価されうるものとなる。

神谷美恵子の宗教思想

——『生きがいについて』の射程——

釘宮 明 美

『生きがいについて』の著者であり、精神科医としてハンセン病医療に携わった神谷美恵子（一九一四—一九七九年）は、